

ヨーロッパのジャズ・シーンにおいて、現在最もレコーディング活動が盛んな国の1つがイタリアであることは疑いない。ここにまた1人、有望なイタリアン・ピアニストが日本に紹介されることとなった。ステファノ・ポラーニの日本デビューをバック・アップし、短期間で認知させた実績を記録。その後ダニーロ・レア、アンドレア・ポツツァと本邦デビュー作を矢継ぎ早に手がけたヴィーナスレコードが、今回制作したのはジョバンニ・グイディ。これが内外を通じての初リーダー・アルバムである。ポラーニやポツツァと同様、グイディもヴィーナスと縁があるトランベッター、エンリコ・ラバの人脈に属す。彼らピアニストたちはヴィーナスでの第1作がリリースされた時点で、日本ではまだ無名の存在だったという共通点があるが、グイディにもそれは当てはまる。それどころが彼らが母国ですでに自己名義作を世に送り、知名度を得ていた現実と比較すると、グイディはまだまだ発展途上のジャズマンと言う方が正確だろう。

ジョバンニ・グイディは1985年イタリアのフォリーニョ生まれというから、まだ今年21歳の若者。ヴィーナスからデビューしたピアニストでは最年少に当たる。それにしてもヴィーナスは冒険に打って出たものだ。日本でどのように受け入れられるか未知数の若手に、こうしてレコーディングの機会を用意し、アルバムを制作したのだから。

ここに1枚のアルバムがある。『Jazz Italiano Live 2006』(Gruppo Editoriale L'Espresso)と題したエンリコ・ラバの新作だ。2006年2月、ローマにおけるホール・コンサートを収録したライブで、ラバ率いるグループ“ニュー・ジェネレーション”にテナー&クラリネットのマウロ・ネグリがゲスト参加した編成。“新世代”と呼ばれるリズム・セクションはジョバンニ・グイディ(p)、フランチェスコ・ボンティチェッリ(b)、エマヌエレ・マニスカルコ(ds)と、グイディ以外の2人もおそらく20代だと思われる。ラバのオリジナル曲が大半を占めるプログラムで、グイディはラバが書いた叙情的なメロディを美しく奏でている。会場の“カーサ・デル・ジャズ”のウェブサイトにアクセスすると、2005年にオープンレストランや書店が併設された施設であることがわかった。またこのラバ盤の他にエンリコ・ビエラヌツィ、パオロ・フレス、ステファノ・ポラーニ、フランチェスコ・カフィーソらイタリアの重要アーティストのライブ・アルバムをリリースしており、今後注目のシリーズとなるのは必至だ。

エンリコ・ラバのオフィシャル・サイトに行ってみると、ディスコグラフィ어의ページには上記ライブ作はまだアップされていなかったので、リリースされてから間もないようである。「現在のプロジェクト」のページにはラバ・ポラーニ・デュオ等と並んでエンリコ・ラバ・ニュー・カルテットの項があり、メンバーは前述のニュー・ジェネレーションと同一だった。両者は実質的に同じものと考えてよさそうだ。バイオグラフィーのページで主なキャリアを確認してみると、ラバは優秀な若手ミュージシャンを自己のグループに起用したり、デュオ・パートナーに抜擢してきたことが改めて認められる。その最新のラインアップに名を連ねているのがジョバンニ・グイディということになる。

今回グイディの日本でのデビュー・アルバムとなる『トゥモロー・ネバー・ノウズ』は、エンリコ・ラバ・カルテットのポス抜きのトリオがそのままグイディのトリオ名義となった格好だ。全員こちらでは無名の新世代ミュージシャンだが、ボンティチェッリはギター+ベース+ドラムスのトリオを率いて活動中。1983年生まれのマニスカルコは近年、エンリコ・ラ

- | |
|---|
| <p>Tomorrow Never Knows トゥモロー・ネバー・ノウズ</p> <p>Giovanni Guidi Trio ジョバンニ・グイディ・トリオ</p> <p>1. スリープ・セーフ・アンド・ウォーム Sleep Safe And Warm 〈C. Komeda〉(3:44)</p> <p>2. ターンアラウンド Turnaround 〈O. Coleman〉(5:33)</p> <p>3. ヨーガ Jóga 〈Bjork〉(4:49)</p> <p>4. バイ・ジス・リバー By This River 〈B. Eno〉(2:21)</p> <p>5. バック・イン・ザ・USSR Back In The USSR 〈J. Lennon , P. McCartney〉(4:07)</p> <p>6. ベガット・キッチン Begatto's Kitchen 〈G. Guidi〉(3:14)</p> <p>7. トゥモロー・ネバー・ノウズ Tomorrow Never Knows 〈J. Lennon , P. McCartney〉(3:54)</p> <p>8. ベラ Bella 〈E. Rava〉(4:40)</p> <p>9. モーション・ピクチャー・サウンドトラック Motion Picture Soundtrack 〈Radiohead〉(4:09)</p> <p>10. ノルウェイの森 Norwegian Wood 〈J. Lennon , P. McCartney〉(3:28)</p> <p>11. ダフ Duff 〈H. Hawes〉(4:30)</p> <p>12. アリス・イン・ネバーランド Alice In Neverland 〈G. Guidi〉(4:25)</p> <p>13. ジロトンド・ベル・フランシス Girotondo Per Francis 〈G. Guidi〉(3:07)</p> |
|---|

ジョバンニ・グイディ Giovanni Guidi (piano)
フランチェスコ・ボンティチェッリ Francesco Ponticelli (bass)
エマヌエレ・マニスカルコ Emanuele Maniscalco (drums)

録音：2006年1月5、6日　ローマ
©© 2006 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara
Recorded at The House Recording Studio in Rome on January 5 & 6 , 2006.
Engineered by Emanuele Bossi Assistant : Cristiano Fini
Artist Management : M. G. M. Produzioni Musicali
Mixed and Masterd by Venus Hyper Magnum Sound :
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Artist Photos by © Paolo Soriani
Designed by Taz

バのグループ“ラバ・アンダー21”に加入してグイディと共に活躍。ステファノ・パターリア、ジャンルカ・ペトレラといった母国の著名ジャズメンと共演しており、現在はサクソ+トロンボーン(ギター)+ベース+ドラムスのカルテットのリーダーでもある。このようにビッグ・ネームのラバとの共演を通じて知名度を高めながら、それぞれの個人キャリアを積み重ねている、というのが彼ら3人の近況と言えるだろう。全13曲のプログラムを見るとエディ・ヒギンズ、ステイーヴ・キューン、ニューヨーク・トリオといった米国系ばかりでなく、アンドレア・ポツツァ、ロブ・アフルベークら欧州系のピアノ・トリオ作とも選曲嗜好が異なっていることが明らかだ。ミュージカル/映画音楽が原曲のスタンダード・ナンバーが1曲もないどころか、トリオでのカバーが一般的な楽曲はしいて言えばオーネット・コールマンの「ターンアラウンド」のみ。ビートルズをはじめロック・ナンバーが半数を占めているのが特色だ。これだけを見ても本作がヴィーナスのカタログにあって、特異なボジションの1枚となることが約束されたことがわかる。

アルバムは「スリープ・セーフ・アンド・ウォーム」で幕を開ける。ポランドのモダン・ジャズにおける最重要人物であるピアニスト/作曲家＝クシシュトフ・コメダが、ロマン・ポランスキー監督映画『ローズマリーの赤ちゃん』のために書いた「子守唄」を、新世代イタリアンのグイディが選んだのが面白い。コメダの音楽そのものに興味を抱いていたからなのか、あるいはシンプル・アコースティック・トリオやトーマス・スタンコのカバー・バージョンに触発されたのか。いずれにしてももここのでやや重苦しく、思索的な演奏は、グイディが真摯な姿勢でコメダの音楽と取り組

んでいることを印象づける。「ターンアラウンド」はピアノ・トリオに限ってもポール・ブレイ、グイード・マヌサルディ、ビル・チャーラップらが吹き込んだオーネットの人気曲。グイディは「ゴリゴリ」と形容したくなる重厚なピアノを響かせながら、低音域主体でアドリブを展開する。続くベース・ソロもその空気感を持続させて、存在感をアピール。数あるこの曲のカバーにあって、ブルースにこだわったこの演奏は特筆ものである。エンリコ・ラバ作曲の「ベラ」は猫のアルバム・カバーが印象的なラバ&エンリコ・ビエラヌツィの同名共演作(Philology)からのナンバー。エンリコと言えばヨーロッパにどまらず、世界レベルで現代ピアノ・シーンの巨匠と呼ぶにふさわしく、グイディは否が応でも意識するはず。だがそんな重圧を脇に置いて、若さのアドバンテージを發揮しながら自分流にまとめ上げた手腕に感心した。本作のジャズ・カバーで異色と言えそうなのが、11曲目の「ダフ」。レッド・ミッチェルのベツレヘム録音作『レッド・ミッチェル』(＝邦題『ジャム・フォー・ユア・ブレッド』、55年)の参加ピアニストであるハンプトン・ホーズが提供したナンバーだ。いきなり時代と地域がタイム・スリップしたような選曲だが、ここでのトリオのアプローチは西海岸ジャズのマナーに則っているわけではない。むしろキース・ジャレット・スタンダーズ・トリオ以降の現代ピアノ・トリオの“語法”を吸収した演奏である。これはグイディらの世代感覚からすれば、実に自然なサウンドだと考えられる。

ロック・ナンバーのカバーではビートルズの3曲が顕著で、前期と後期のレパートリーにまたがっているあたりにグイディのこだわりぶりもうかがえる。『ホホワイト・アルバム』からの「バック・イン・ザ・USSR」は意表を突いて原曲よりもテンポ・ダウンし、テーマ・メロディを自由に発展させられる素材として楽曲を扱っていることに思い至る。『リボルバー』からの「トゥ

モロー・ネバー・ノウズ」は前半、グイディが徹底的に低音域に固執したブレイがほとんど原曲の原型をとどめていないほどで、それが逆に一種の爽快感を与えてくれるのがユニーク。『ラバー・ソウル』からの「ノルウェーの森」は他のトリオ・バージョンも散見できるが、グイディはテーマで重層的リズムを用い、展開部では急速調で新たな生命を吹き込んでいる。決して聴きやすさを意図した演奏でない点に留意したい。レディオヘッドはブラッド・メルドー(1970年生まれ)がレパートリーに始めた頃から、ジャズ界でもニュー・スタンダードとなったようだ。「モーション・ピクチャー・サウンドトラック」はグイディ・トリオの好ましいバラード表現に挙げられる仕上がりに。ブライアン・イーノ作曲の「バイ・ジス・リバー」は本作で最も違和感があるかもしれない。だがヨーロッパで人気の高いバスカルズのカバーだと知れば、この選曲にも納得がいく。アイスランドが生んだ世界的な歌姫＝ビヨークの「ヨーガ」は、グイディ好みだとわかるバラードだ。

グイディは3曲のオリジナルを加えて作曲家としての力量をアルバムに刻んでいる。中でもアンコール風のアップ・ナンバー「ジロトンド・ベル・フランシス」が楽しい。前述のエンリコ・ラバ盤を聴いた後で本作に耳を傾ければ、グイディが表明したかった音楽家の主張が感じられるに違いない。このタイミングでジョバンニ・グイディの初リーダー作が世に出たことを、皆さんと喜びたい思いである。